

性教育絵本の分析(2)

—伝え手の反応分析の試み—

池 田 政 子

前報¹⁾に述べられたように、絵本を媒体として性に関するメッセージ(伝達内容)が送り手である作者から、受け手である子どもへと伝達される過程において、両者の間に必ず伝え手としてのおとなの「選ぶ」という行為が介在する。そして、ある絵本がある伝え手によって選ばれるかどうか、すなわち、受容されるか拒否されるかは、伝え手自身のその絵本に対する反応に負うところが大きいと考えられる。このような反応を具体的な数値によって表示された資料として得るにはどのような方法があるだろうか。ある絵本に対する反応を量的に測定するにあたっては、測定されるべき事象が特定されなければならないし、その事象をどのような尺度によって測定するか決定する必要がある。しかしながら、絵本に関してのこのような量的測定による研究は、現在のところ未開拓の領域と言ってよい。無論、絵本の量的測定自体については疑問も提出されている。安藤美紀夫(1980)²⁾は絵本の作者としての立場から、自分の関心は量的ではなく、質的にどう読まれているかであるとし、「創造的活動にとって一般に受け入れられることは必ずしもいいこととは限らない」こと、また、「ある絵本が、ある子どもにとってどう読まれ、それがその子にとってどういう意味を持つのかといった測定がなされなければ、絵本研究が書き手に新鮮なショックを与えることができない」と指摘し、さらにそうした測定の可能性について疑念を表明している。「子どもの本の研究をどうすすめるか」と題した座談会³⁾(1977)の中で、渋谷清視(児童文学評論家)は、(子どもにとっての)おもしろさという問題についても現場(文庫、図書館など)での実践活動の結果についての調査報告のみでは

不十分であるとし、文芸学のみならず統計学、心理学などを含む学際的な新しい分野が確立されるべきであると発言している。一方、小河内芳子(児童図書館研究会会長)からは、心理学的な調査は現場にとって目安にはなるが、強調し過ぎるべきでないこと、結局は現場で長年読みつがれてきたものがよいものなのではないかという意見が出されている。これらを受けて、心理学研究者の立場から佐々木宏子は、「本と子どもがかかわっているナマの時点からデータをとるというやり方が、今までの心理学になかった」こと、そして徹底的な事例研究の中から「結果として共通するものが出てくる」可能性があることを述べている。さらに佐々木は、このような心理学的研究に際し、研究者自身が自らの価値観を確認すること、すなわち「……何を伝えたいか、どういうことを子どもの中から引き出したいかという本質的な問題がかかわらないと」、意味のある資料が得られたと言えないことを指摘している。佐々木はこの後(1979)⁴⁾量的測定による研究を発表している。美意識の発達という観点から「ネコ」という対象について、5種の絵本の中の絵と一枚のカラー写真を被験者(幼稚園児、小学生、各種学校学生)に提示し、「好きなネコ」の順位をつけさせ、さらに最上位、最下位とされたネコについてその理由をたずね、その結果と、それぞれの絵についてあらかじめ実験者自身により記述された特徴とを照合するという方法が採られている。これは、ある1冊の絵本が全体としてどう受容されるかという視点からの研究ではないが、方法としては、心理学的方法の基礎的なスタイルと言ってよい。

性教育絵本という対象について、このような

論議をどう考慮すべきであろうか。佐々木 (1980) は絵本の絵を「形象的・手段としての絵」(傍点は筆者)と「感覚的・直覚的形式としての絵」の2つに分類しているが、前報では、性教育絵本の絵はこの分類によれば前者に属すること、さらに、それは単に子どもの言語的思考の未熟さを補うためばかりでなく、「性」という伝達内容自体が(写真ではなく)絵や図を要求していることを指摘した。この点から、性教育絵本の絵は、2つの役割を負っていると言える。1つは、伝達すべき内容をより正確に子どもに伝達するための手段としての役割、しかしながらただ情報として「正確に」というだけでなく、「性」について伝えたいと望む方向でのイメージを表現していなくてはならないというのがもう1つである。後者の役割については「感覚的・直覚的形式の絵」と同程度の創造性が要求されていると言ってよい。この意味では、前者の役割は、量的測定を比較的受け入れ易く後者はなじみにくいということになる。伝え手と受け手の反応を知ること自体の意味については前報(3.研究の枠組(2))でふれた。量的測定によっていわゆる「一般的傾向」が把握されたとしても、それは個々の「伝え手—絵本—受け手」の現実の関係と直接結びつくものでないことは確かである。本稿では、この点を確認しつつ、量的測定の意味と可能性を求める方向での実験と分析結果を報告する。

§ 1. 実験の目的と方法

次の2点を検討するため実験が計画された。

- (1) 伝え手である「おとな」の受容(あるいは拒否)と絵本の構造との関係
- (2) 絵本に対する「おとな」の反応を量的に測定し分析する方法

1. 被験者 幼児教育専攻の女子学生(18~20歳)65名。

2. 材料 A. 「あかちゃんがうまれる⁶⁾」
B. 「ぼくどこからきたの?⁷⁾」

この2つを選んだ明確な基準はない。この基準が設定されるためには、前報に述べたような

「絵本の構造の分析」が行なわれなければならないが、今回は実験者がアプリオリに拾いあげた特徴の記述にとどまっているためである。両者とも訳本であることが共通しているが、文・絵ともに非常に違った印象を受ける。本稿での報告はAについてのみであるので、Aの構造の特徴について記述しておく。前報附表に示したように主な伝達内容は、男女の身体的差異、異性への感情・恋愛、結婚、性交、受精、妊娠・胎児の成長、出産・誕生、授乳などであり、他に比べ特徴的なのは月経、避妊、婚外出生児などにもふれていることである。また、男女の出会い、デートなど結婚に至るまでの過程に比較的多くのページが割かれていることも特徴である。このような内容について、男児と女児2人が進行係、いわば“狂言回し”の役をしながらその父母たちが自分の経験を語る形で展開されて行く。語りの形式はほとんど会話体である。絵は黒白のみの線画である。

3. 絵本の受容(あるいは拒否)の尺度
「自分の子どもに読ませたいか」という問いに対し、「はい」と答えた者はその絵本を受容し、「いいえ」と答えた者は拒否したとみなした。

4. 絵本の構造と測定の対象および方法
材料の構造上の特徴については、2で述べた。これらを構造化して実験計画に組み入れるような扱いをすることはできなかったため、測定結果の分析の際に適宜言及することになる。今回の直接の測定対象は全場面の絵および文であり各場面について同一の測定方法がとられた。

1) 絵 各場面の絵全体について「とても好感が持てる」から「とても不快、抵抗を感じる」までの5段階で評定(好嫌度の測定)さらにその場面のどの部分がそういう感じを与えるか円で囲んで示すよう求めた。評定は下の要領でいずれかの印を各場面の余白に記入することによって行なわれた。

とても好感が持てる→◎

好感が持てる→○

どちらとも思わない→(記入せず)

不快だ、抵抗を感じる→×

とても不快、抵抗を感じる→××

2) 文 「抵抗を感じる」「不快だ」「とっ
てしまいたい」などと感ずる部分に下線を引く
よう求めた。

5. 手続き 被験者約30名ずつ2回に分けて
の集団実験として以下の手続きがとられた。

1) 次の点につき質問紙による調査

- 「性」および「妊娠・出産」についてそ
れぞれのイメージを表わす形容語
- 将来自分の子どもに「赤ちゃんはどこか
らくるの?」というような質問をされた
らどう答えるか

2) 材料AおよびBについて、見開き2ペー
ジを1枚としたスライドを呈示。これは、次に
述べるように実際の測定には材料のコピーを用
いたので、それぞれの絵本（特にBはカラー印
刷であるため）の全体としての雰囲気をする
だけ伝えるための補助手段として行なった。

3) 材料AおよびBを実尺でコピーした冊子
を配布し、上記4. の測定を各ページごとに行
なった。A, Bの測定順序は2回の実験で異な
っている。

4) 質問紙により、次の点につき回答を求め
た。

- 上記3. について
- A, B各絵本の受け手として適当と思う
子どもの年齢（「この本は何才以上の子
どもに向いていると思うか」）
- A, B各絵本に登場する子どもの年齢の
推定

§ 2. 絵に対する反応の分析

以下は材料Aの結果についての報告である。

1. 場面構成の記号化

各場面に描かれたものの特徴を把握するため
に次の3つの要素を表示する目的で記号化を試
みた。

- A. 登場人物の特性
- B. 登場人物の身体部位とその様相
- C. 登場人物同志の身体的接触の有無
- A. 登場人物の性、年齢、人数等を記号化し

た。

女性 F, 男性 M
女兒 f, 男児 m
乳児 B, 胎児 b

同一の記号で表示できる登場人物が複数ある場
合には、その記号の前に人数を示す数字を添え
ることとする。例えば、女兒2人に男児1人が
描かれている場合には「2 f m」と表示。

B. 各場面で登場人物の身体の中のどの部分が描
かれているか、着衣か裸体であるかを表示。被
験者の絵に対する反応のうち円で囲まれた部分
を参考に、その最小部分を表示できるように決
定した（図1）。胴部について、裸体で描ける場

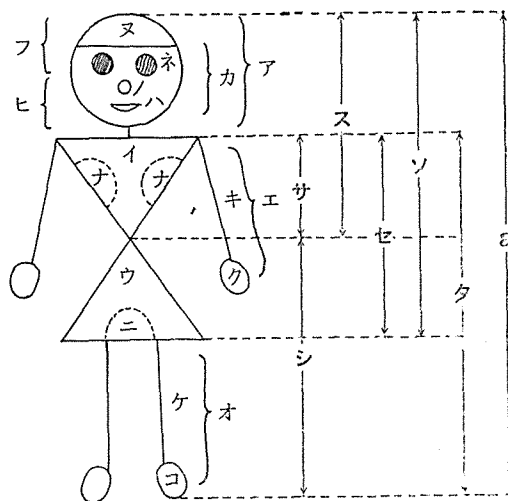


図1 身体各部の記号による表示

合は「下線」によって示すこととする。「ニ」
は性器であり、「ソ'」などの「'」は性器を
含んでいることを表示。「B'」はヘソの緒を
つけた新生児を示す。例えば、女性の裸体の全
身が前向きで描かれていれば「F (a')」と
記号化される。

C. 登場人物が身体的接触をしている状態で
描かれている場合には、これらの人物を表示す
る記号を〔 〕で囲んで示す。

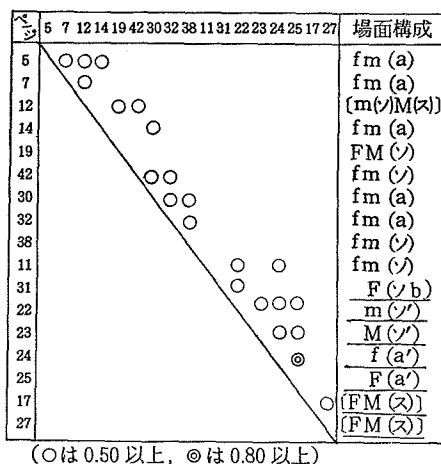
2. 場面間の相関

全38場面についての好嫌度の5段階評定の結
果を+2~-2まで5点の範囲で数値を与え、

* これについては本稿では報告されない。

全被験者の値によって各場面間の積率相関係数を算出し、0.50以上の相関のある場面のみを取り出しグルーピングを試みたのが表1である。

表1 場面間の相関



これによると相互に相関の高い3種の場面が取り出せよう。第1は1組の男児と女児の登場する場面、第2は性器の描かれた場面、第3は男女の性的行為を表現した場面である。第2と第3の場面は裸体が描かれていることについて共通しているが相互の相関はほとんどなく、裸体という特徴のみでは同様の反応を引き起こさないことを示している。もちろんこの相関表は場面構成のみでは解釈し得ない。例えば、ページ（以下Pと略す）11と22、24に相関がみられるが、前者は男児と女児、後二者は性器の描かれた裸体の男児と女児であり、絵のみでは「子ども」という共通性しか見出せない。しかし、P11の文は、m「……ぜんぶはなしてくれたよ、どう

いうふうにこどもができるか」、f「しってるわ、あいするっていうことでしょ」というものであり、これに被験者の評定が影響された可能性が考えられる。このことは絵に対する反応と文に対する反応とを独立に取り出すことの困難さを示しており、同時にある場面から受ける印象にとって絵と文とどちらの比重が大であるかという問題を提示している。この意味では、上述の第1の場面は絵自体は中性的であり、文によってその場面全体の伝達内容が決定されているもの、第2、第3の場面は伝達内容の多くを絵に依っているものと言えよう。この点は絵本の構造分析の際に考慮すべきであろう。この相関表からは、同一の画家による絵の好嫌度の評定にあたって、被験者の中にいくつかのある程度相互に独立した下位体系を持つ評定システムが存在することが、示唆されたと言ってよいであろう。

3 各場面に対する反応

各場面につき次の3つの値を算出した。

- (1) 好感率（全被験者のうち○および◎を記入した者の割合）
- (2) 不快率（同様に×、××を記入した者の割合）
- (3) チェック率（上記(1)、(2)の合計であり、「どちらとも思わない」を除き、好感にせよ不快にせよ情緒的に意味のある反応を誘発された被験者の割合）

全場面のチェック率の range は7.7～53.8（％）であった。チェック率の高かった場面について、(1)～(3)を表2に示した。これによると、

表2 各場面の絵全体に対する反応

ページ	場 面 構 成	伝 達 内 容*	チェック率	好 感 率	不 快 率
39	[B (a) F(×)]	授 乳	53.8	53.8	0.0
25	F (a')	女 性 性 器	49.2	13.8	35.4
19	FM(∧)	結 婚 式	49.2	49.2	0.0
12	[m(∧)M(×)]	(男女の出会い)	47.7	47.7	0.0
37	[B' F (a)] M(×)	出 産	44.6	30.8	13.8
34	[m(×)F(∧)]	(9カ月の胎児)の 様 子	41.5	41.5	0.0

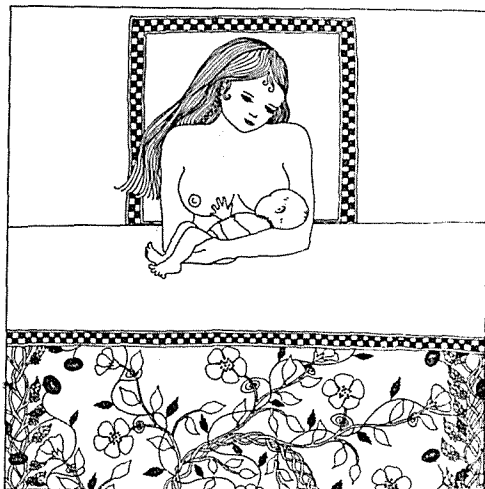
24	f (a')	女 児 性 器	38.5	15.4	23.1
23	M (ソ')	男 性 性 器	36.9	12.3	24.6
17	[FM(ス)]	抱 擁	36.9	21.5	15.4
13	FM(ノ)	デ ー ト	36.9	35.3	1.5
31	F (ソ b)	妊 婦 ・ 胎 児	35.4	32.3	3.1
41	m (a) FM(オ)	親 子	35.4	33.8	1.5
33	F (a)	妊 婦	33.8	20.0	13.8
7	f m (a)	男 児 と 女 児	29.2	29.2	0.0
27	[FM(ス)]	抱 擁	27.7	10.8	16.9
21	[FM(ノ)]	シ ョ ッ ピ ン グ	27.7	15.4	12.3
35	[FM (a)]	妊 婦 と 夫	27.7	16.9	10.8
29	F (ソ')	妊 婦	27.7	20.0	7.7
22	m (ソ')	男 児 性 器	18.5	15.4	3.1

(数値はすべて百分率)

* () は主として「文」による伝達

被験者の情緒的反応を引き起した場面は3群に大別できるように思われる。第1群は好感率の高かった場面で、P39, 19, 12, 34 (図版1～4), 13, 31 (図版5), 41などである。これらの特徴は、31を除いてはすべて着衣していること、身体的接触のある親子、あるいは身体的接触のない若い男女が、描かれていることである。第2群は好感と不快と反応が分れた場面でP37, 17 (図版6, 7), 33, 21, 35 (図版

8) などであり、出産、身体的接触のある男女が描かれている。第3群は、不快率が好感率を上回った場面であり、P25, 24, 23, 27 (図版9～12) のように性器、性行為の描かれた場面である。特に女性性器の描かれたP25は不快率が最も高くなっている。これに対し、男児の性器が描かれたP22 (図版13) はチェック率、不快率ともに低い。



(図版1)



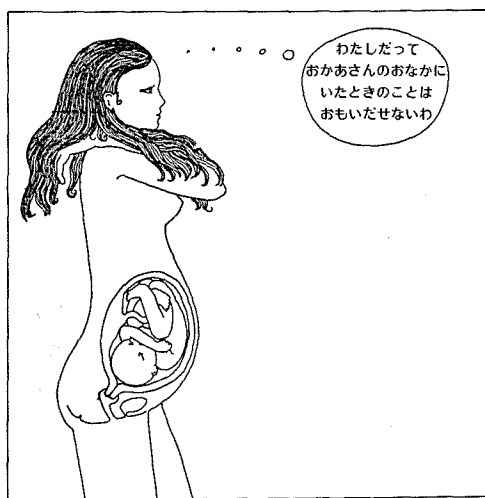
(図版2)



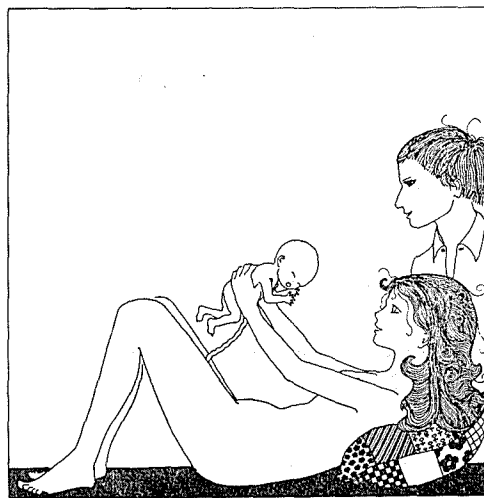
(図版 3)



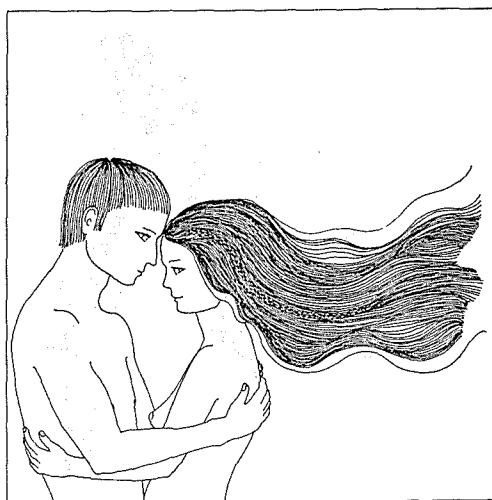
(図版 4)



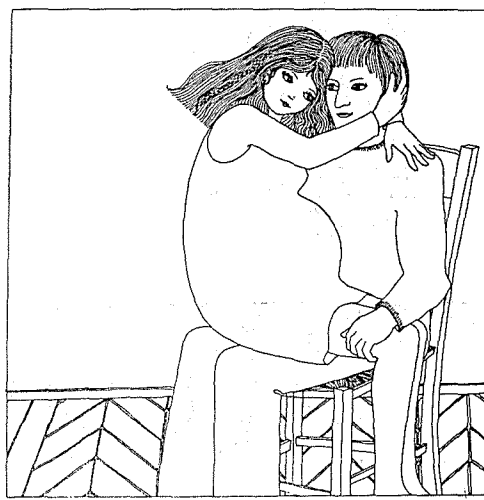
(図版 5)



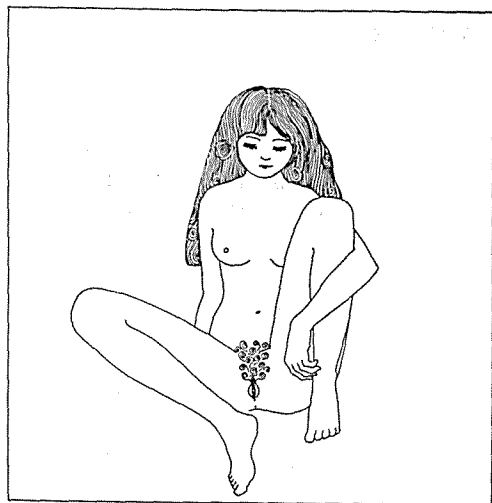
(図版 6)



(図版 7)



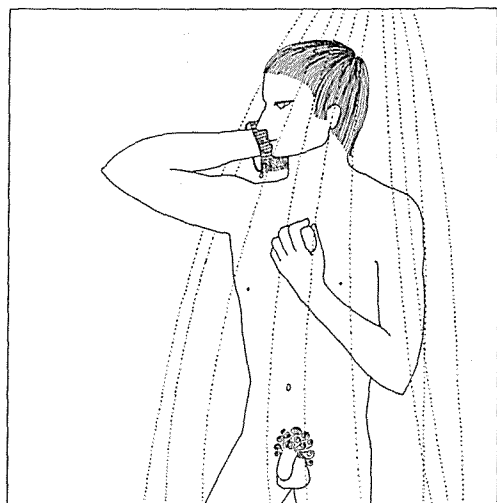
(図版 8)



(図版 9)



(図版 10)



(図版 11)



(図版 12)



(図版 13)

次に、「特にそう感じさせる部分」として円で囲まれた部分（以下「注目部」と呼ぶ）を前述の表示法に従って記号化し、3群の各場面の比較をしたのが表3-1～3である。第1群でP39, 12, 34など親子の身体的接触がある場面では、その部分のみを特にチェック（円で囲む）した者も多く、「乳を含ませる」「子どもを抱く」「子どもの頭に手をやる」などの表現がその場面に対する「好感」を引起す要因となっていることが推測できる。第2, 3群のように被験者の反応が分れた場面については、「好感」を持った者は場面全体を、「不快」を感じた者は場面の特定部分（例えば、MがFの「肩を抱

表 3-1 第 1 群の注目部

ページ	注目部および人数*	特 徴
39 (図版 1)	[B(a)F(ス)] 25 ① その他 10 ②	「その他」は、Fの顔を含 まず、「授乳」部分のみを 注目部としたもの
19 (図版 2)	FM { ソ 29 ス 3	場面全体への注目
12 (図版 3)	m { サ or セ 12 ② ソ or ス 16 ① その他 3 M { ク or エ 14 ② ス 15 ① カ 2	①は注目部に「身体的接 触」部分を含み、②は、 「接触」部分のみへの注目 であることを示す（他も同 じ）。後者も約4割あり
34 (図版 4)	m { ス 23 ① ア 4 ② F { セ or ク or ウ 13 ② ス or ソ 14 ①	mは全体、Fは接触部分の みへの注目も約半数あり
13	FM { ア or カ 7 ス or ソ 14 エ or サ 2	FとMの「見つめ合い」あ るいは「手の動作」への注 目
31 (図版 5)	F { ウb or セb 13 ソb 8	胎児への注目

*「好感」(◎, ○)とした者のみについて実数で示す。

表 3-2 第 2 群の注目部

ページ	注目部	「好感」とし た者 (L)	「不快」とし た者 (D)	特 徴
37 (図版 6)	B' (a) ① F { a ② カ or ア その他 M (ス or カ)	{ 17 10 3 7 13 (20)*	{ 8 2 1 6 0 (9)*	(L)について、場面 全体 (Mを含む) への 注目、(D)について は、「ヘソの緒」をつ けた新生児への注目
17 (図版 7)	FM { ス ① サその他 ② ア	{ 11 2 1 (14)	{ 7 3 0 (10)*	(L)、(D)とも注 目部は同じで、場面全 体が多い

33	F { a or カサ or ソ サ or ウエ or タ オ or コ	9 3 1 (13)	1 0 8 (9)	(L) は上半身、(D) は足への注目
21	FM (ソ or ス) ㊶ F(イ)M(エ) ㊷	10 0 (10)	2 6 (8)	(L) は全体、(D) は「肩を抱く」部分への注目
35 {図版 8}	FM (a or ソ) ㊶ F(エ)M(ス) ㊷	11 0 (11)	6 1 (7)	(L)、(D) とも注目部は同じで場面全体

※「好感」とした者、「不快」とした者、それぞれの総数

表 3-3 第 3 群 の 注 目 部

ページ	注 目 部	「好感」とした者 (L)	「不快」とした者 (D)	特 徴
25 {図版 9}	<u>F</u> { a' タ' ニ ア	8 0 1 0 (9)	7 5 10 1 (23)	(L) は全体、(D) は首から下、性器のみへの注目も多い
24 {図版 10}	<u>f</u> { a' タ' ニ ネ	7 1 2 0 (10)	6 5 3 1 (15)	(L) は全体、(D) は、首から下の部分への注目
23 {図版 11}	<u>M</u> { ソ' セ' ニ	7 0 1 (8)	3 2 11 (16)	(L) は全体、(D) は、性器への注目
27 {図版 12}	<u>FM</u> { ス カ or ㄣ ㊸	5 2 (7)	9 2 (11)	注目部同じ

いている」部分、性器など)をチェックすることが多い傾向を指摘できる。ただしP17, 35, 27のように場面のほぼ全体が同じようにチェックされ、かつ好嫌の分れる場面もあった。第3群では、性器のみがチェックされた比率は男性性器が最も高く(P23), 次いで女性性器(P25)となっている。女性、女兒(P24)の場合身体全体あるいは首から下の部分のチェックが比較的多く、単に性器の描出ということだけでなく、「足を開いての座位」という姿勢も「不快」の要因となっていることが考えられる。

§ 3 文に対する反応の分析

会話文、地の文を含め全体で82文、長短は様々である。各文について、「不快、抵抗がある」としてその文のどこかに下線を引いた被験者数の全被験者数に対する割合(百分率)を(文の)チェック率とし、これの高い文を表4—2に示した。被験者全体の全文についてのチェック数(チェックされた文の数)の分布は表4—1のとうりである。最頻値は0であり13まで

表 4—1 「不快」としてチェックされた文の度数分布

チェックされた文の数	人 数 (百分率)
0	20 (30.8)
1 ~ 2	20 (30.8)
3 ~ 4	11 (16.9)
5 ~ 6	8 (12.3)
7 ~ 8	1 (1.5)
9 ~ 10	2 (3.1)
11 ~ 12	2 (3.1)
13	1 (1.5)
計	65 (100.0)

の range を持つJ型の分布となっているのが特徴である。全体としてチェック率は低く、性器、性的行為、生殖過程を表現し、客観的に説明したことば、文の多くは受容された(おちん

ちん(0%), おへや(1.5%), あかちゃんのベッド(3%), ベつのからだかひとつにむすびついて(6.2%), からだをよせあってあいしあう(1.5%)など)。ただし、避妊(文

表4—2 「不快・抵抗」を感じた文

文番号	文	話し手→聞き手	チェック率
17	わたしも <u>あいしあいたい</u> わ	f → m	28.8
1	きみ <u>すてき</u> だね	m → f	22.7
18	<u>くちづけ</u> したい <u>だきしめ</u> たい <u>いつも</u> <u>そうおも</u> っていた	M → m	22.7
19	ぼくだって <u>いつも</u> <u>そう</u> したいな	m → M	22.7

77	ぼくも <u>かのじょ</u> がつかれたらほにゅうびんをかってやろうと?	m → f	19.7
82	あなたも <u>すてき</u> だわ	f → m	19.7
52	ふたつのいのちのもとがであわないようにすることもできる	(地の文)	15.2
45	もし <u>あかちゃん</u> がこなければベツトはこわれてちがすこしながれるわ	F → f	13.6

(下線は各文の中で特にチェックの多かった部分を示す)

52), 月経(文45)についてふれた文に関してはチェック率が比較的高かった。一方, チェック率の高かった文は, 性的感情・欲求の表明を含む文であり特に子どもがその話し手である場合に抵抗があると言える。被験者が推定した, この絵本に登場する子どもの年令は平均 8.9才 (range 4~15) であったが, 描かれた子どもとその会話内容および使用されることば(例えば, 「かのじょ」という三人称のチェックが多かったように)との間の微妙な不均衡が被験者の「不快」の要因となっていることも考えら

れる。これは翻訳の絵本であることとも関係しているであろう。

§ 4 対象年令の判断

この絵本の「受け手として適当と思われる最低年令」について, 回答の平均は 8.1才 (SD 2.35, range 3~13) であった。この年令と各場面の絵に対する好嫌度 (+2~-2までの値) との相関係数を算出したところ, 絶対値 0.3以上のものはすべて負となった (表5)。これらの場面の特徴は P17を除いてはすべて子

表5 対象年令と絵に対する反応との相関

ページ	場 面 構 成	相 関 係 数	場 面 の 特 徴
43	fm(ノ)	- .39	男児と女兒
42	fm(ノ)	- .37	"
40	[m(ス)M(ノ)]	- .36	父 子
6	fm (a)	- .36	男児と女兒
30	fm (a)	- .36	"
32	fm (a)	- .35	"
17	[FM(ス)]	- .33	抱 擁
41	m (a) FM(オ)	- .32	親 子
39	[B (a) F(ス)]	- .31	授乳 (母子)

どもが描かれていること, またほとんどがチェック率が低く, 情緒的反応をあまり引起さなかった場面であることである。また登場する子どもの推定年令と対象年令との相関は0.57でありこの絵本の場合両者の判断の間に関係があると思われるが因果性については不明である。上記の場面の絵について相対的に好感を持つ者程, 低年令向きと判断する傾向がみられ, 性器や性

的行為の描かれた場面に対する好嫌とは, 関係がみられなかった。文については, 対象年令と各被験者のチェック数および全文を9つの構成部分に分けたそれぞれのチェック数との相関係数はすべて負で絶対値0.15以下であり, 不快な文の多少と対象年令の判断とは関連がみられなかった。以上, 対象年令の判断に絵がある程度関係していることが推測できるが, 表5の絵の

多くはそれのみでは伝達すべき内容のわからないものであり、文との関係を質的に検討する必要があるが、この結果からは伝え手自身の好嫌は後述のようにその絵本を受け手に与えたいかどうかという選択の基準にはなっても、何才の子どもに与えるかという対象年齢の判断に際してはさ程大きな要因とはならないと考えてよいであろう。

§ 5 絵本の受容に関する要因

「自分の子どもに読んでやりたいか」という問いに対し、72% (47名) が「はい」、22% (14名) が「いいえ」と答え、この絵本は全体的には受容されたと言えよう。前者を受容群、後者を拒否群とし両群の比較を行なった。絵および文のチェック数との関係は表6のとおりである。

表6 絵および文のチェック数と受容との関係

	チエック	受 容 群		拒 否 群		検 定
		$\bar{X}$	(SD)	$\bar{X}$	(SD)	
絵	(ア)○, ◎の総数	8.60	(6.94)	5.21	(4.70)	1.68
	(イ)×, ××の総数	1.55	(2.18)	4.29	(3.08)	3.65**
	(ア)―(イ)	7.04	(6.80)	0.92	(6.23)	2.41*
文	下線を引かれた文の数	1.19	(Mdn)	3.90	(Mdn)	

(**は1%水準, *は5%水準で有意)

絵については、好感を持った場面の多少よりも不快・抵抗を感じた場面の数あるいは両者の差が受容―拒否に関係しているようである。また文についても拒否群では「不快」としてチェックされた文の数が多く、差がみられた。従って絵および文に対する「不快」の程度がこの絵

本の受容―拒否に関わっていると言える。次に絵・文それぞれについて、両群の反応に有意差のみられたものを表7、8に示した。絵については、性器を含む裸体 (P23, 24, 25), 性行為 (P17) の描かれた場面について両群の差が大であった。また量的な差のみでなく、P24

表7 受容―拒否にかかわる場面

ページ	受 容 群		拒 否 群		t 値
	$\bar{X}$	(SD)	$\bar{X}$	(SD)	
24	.04	(.68)	-.71	(.70)	3.56**
25	-.13	(.76)	-.86	(.74)	3.11**
23	-.09	(.68)	-.57	(.73)	2.27*
27	.06	(.56)	-.36	(.48)	2.50*
13	.45	(.61)	.07	(.26)	2.20*
16	.28	(.45)	-.07	(.46)	2.50*
35	.13	(.57)	-.21	(.41)	2.06*

(5段階評定を+2～-2まで数値化したものによる。各ページの場面構成については表2を参照、P16は「m(×)M(×)」)

表8 受容—拒否にかかわる文

文番号	チエック率 (%)		χ^2 値
	受 容 群	拒 否 群	
1	17.0	42.9	4.07*
19	17.0	42.9	4.07*
82	12.8	35.7	3.84*

(文の内容については表4—2参照)

27, 16, 35については受容群が正(好感), 拒否群が負(不快)と, 反応の質に違いがみられた。P16は手をつないだ父子の描かれている場面で, 絵それ自体は「性」を感じさせず中性的であるが, 会話の内容はチェック率の高かった18および19(表4—2)であり, これについても絵の評定が文の内容に影響された可能性を考えることができる。文については, チェック率の高かったものの中でも特に子どもが性的な感情, 欲求を表明した内容の文について拒否群のチェック率が高かった。以上, 絵および文に対して全般的に不快感がないこと, 特に子どもの性的感情を表現した文, 性器・性行為を表現した絵に抵抗感の少ないことが, この絵本の受容に関係している。性についての容観的説明や性器を表わすことば自体はほとんどが抵抗なく受け取られていた。なお, 登場する子どもの推定年齢, この絵本の対象年齢については両群に有意差はなかった。

§ 6 問 題

上に述べられた結果は, あくまでも, 完成された既成のものとしてのこの絵本について, かつ性的な体験も少いと思われる未婚の若い女性についてのものであり, 一般化することはできない。たとえばこの絵本の受容に関する要因として述べられた「性器・性行為を表現した絵に抵抗のないこと」についても, この絵本での表現に関しての事であり, この要因が一般化できるかどうかは, 種々の表現法をとっている他の絵本との比較を行うこと, それらの表現の中どのような要素が抵抗感の誘発に結びついているのかを検討する必要がある。文の要素については絵ほど多様, 多義ではないと考えられるの

で, たとえば「おちんちん」ということばのチェック率が低かったというような結果を一般化することにそれ程危険はないと思われ, 性に関する伝達内容をどう表現すれば抵抗感なく受けとられるかということに関し資料が蓄積されたと言ってよいであろう。

今回, 統一ある全体としての既成の絵本を材料として用いその全体性を損ねないような形で被験者に呈示したことは, 実際に伝え手や受け手が手にする形での絵本に対する反応を検討するためのアプローチとしては意味があるが, 種々の反応にかかわる要因を分析することに比重が置かれる場合には不十分であると言えよう。たとえば, 今回は1ページごとに絵と文両方の評定をする方法をとった。実際の絵本ではこの2つは融合して1つの場面を作り, ある効果を読者に与えているのであるから, 本来分離することは不可能であり, その意味では, この方法は首肯されるのだが, ある伝達内容を伝えるべき特定の場面から受ける印象にとって絵と文どちらの比重が大であるかという問題になると, この方法によっては判断できない。何らかの実験的操作を加え, 既成の絵本を分解して, 当該の要素のみをとり出し比較するような方法をとらざるを得ないであろう。また, 今回はページを追って順に評定をしてもらったが, 絵本にとって重要と思われる時間的構成の影響(たとえば同じ絵でも他の絵との順序関係によって印象が異なる可能性)も, 物語絵本ほどではないにせよ問題にすべきであり, この検討のためにはやはり実験的な操作が必要であろう。このように, 個別の絵本から性教育絵本一般に至る方法が見出せるかどうかは量的測定の有効性の問題でもあり引き続き検討されるべきである。

反応分析の試みとしていくつかの方法を用いた。絵本の場面構成の記号化もその1つであり、ここでとりあげた3つの要素（登場人物，身体部位と様相，身体的接触）は性教育絵本の分析のためには，ある程度有効であったと考える。さらに，伝達内容を絵と文どちらが多く担っているか，「伝達様式」とでもいうような要素を絵本の構造分析にあたって考慮すれば，各場面の特徴が一層明確になると思われる。もう1つ，注目部として「円で囲む」という方法をとったが，これも場面全体の評定を解釈する際に有効であったと考える。ただし，教示の与え方によってもう少し精度を良くすることが可能であるように思われた。

また，伝え手としてのおとなの受容（受け手に与えるという選択をするかどうか）に関連する要因を検討するために「伝え手自身の好嫌」という尺度を用い，これが受容に関係するという結果が得られたが，性教育絵本としての各場面の適切さに対する判断に関しても資料を得るべきであろう。これに関連して，対象年令の判断と絵本の構造（主として伝達内容）との関係を検討すべきと思われる。

引用文献

- 1) 池田政子 1983 性教育絵本の分析(1)
—研究の展望— 山梨県立女子短期大学紀要
16, 39—44
- 2) 安藤美紀夫 1980 コメント—創造にとって量的測定はどんな意味を持つのか—
藤原喜悦ほか編 児童心理学の進歩 —1980年版— 331—335
- 3) 鳥越信, 佐々木宏子, 小河内芳子, 渋谷清視
1977 座談会 子どもの本の研究をどうすすめるか 日本子どもの本研究会編 子どもの本棚
季刊21号 5—27 明治図書
- 4) 佐々木宏子 1979 知覚の発達と美意識について(1)—絵本の絵の選択をとおして— 日本教育
心理学会第21回総会発表論文集 70—71
- 5) 佐々木宏子 1980 絵本—心理学からの研究視
点をさぐる— 藤原喜悦ほか編 児童心理学の
進歩—1980年版— 309—330 金子書房
- 6) A.ロザンスチエール著・画 庄司洋子訳
1978 あかちゃんがうまれる 草土文化
- 7) ピーター・メイル著 アーサーロビンス画 谷
川俊太郎訳 1974 ぼくどこからきたの? 河
出書房新社